

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	感冒：小説
Author(s)	池田，小一郎
Citation	龍南會雜誌， 1 6 6： 5 1 - 6 7
Issue date	1918-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6784">http://hdl.handle.net/2298/6784</a>
Right	

小説 感 冒

文科二年 池田 小一郎

「こんなお寒いお天気にようこそね、ですけど、ほんとにはほんとに汚穢ひまぐろしくてね。久々で御座いますのになにつて、おかまひも出来ませんのよ。」

「いね何も、小母おはさんおかまひいりませんです。暖かいううでも出ますと、矢張り冷わますね。そして俵はろがないんでせう。」

「ヤアさうですか。そりやおひごい。ステーションからでも一寸ありますからね。さうさう、嶋崎さん此の家は貴方おはじめでしたね。かうと、いつだつたの？久ひさや。」

「何ですつて？」

「何つて、あれさ。此處に越したのさ。」

「さう。もう随分ですわ。かれこれ四年でせうよ。」

「ね、さうかい。兎に角こんな所に落ち込んだんですよ。……然しほんとに今日はよかつた。よくもこんな家うちでも尋ねようと思つて下すつた。」

義郎は豫期した沈淪には驚かないがどうしても主人は想像の外にあつた。東京の黄塵中にある筈の影が西の端の煤煙中に紫の煙をふかしてゐた。驚くのは尤である。けれども義郎はそれを表情しない。表情したくもなければ、しようと思つたつて出来もしない。出来たらそれはお世辭である。おべつかである。しかも彼

の胸には人一倍神經質を藏してゐるといふ所に、彼の性格が動いてゐる。

それに一面どこか卒直である。

「餘り御無沙汰ですから今日はおまみわがてら參りました。」

「それはよくもまあお珍らしく……………貴郎さつきね。さんと失禮しましたの。お見知り申した様な方だとは思ひましたけど、よもや島崎の坊ちゃんとは存じませんで。すつかりお見忘れしてしまつたんですよホホ、い、い、い、い。」

「ハツハツハ、い、い、い、さうだらう。もう立派な御主人だからな。家にはデアポロのお上手な頃いらつしたきり位だらうよ。」

主人はデアポロとはどこで思ひついたのか、又その言は皮肉だが、單に事實を語つてゐるつもりだか不明である。

「デアポロつてば？」

「家の武坊もよくやつてたぢやないか。握飯を二つくつつけたような奴、高くほをり上げたり何かする獨樂が流行つたんさ。」

主人の言は飽くまで無造作である。

二階に六疊が二間、そして二間きりである。一間は大小雑多な道具が押詰つて、足の踏み場は一疊半に過ぎぬ、そこに、一足毎にムリ／＼音だてる怪しげな段梯子が、矢張り六疊程の狭い茶の間に通じてゐる。一間には小綺麗な白木の簞笥、それに隣つて小さな佛壇、扉が半ば開かれて位牌の金字が鮮かに、而かも濡つ

ばい色で讀まれる。また、手前にも年代をくつた栗色の筆筒が高低二つ列べてある。その上に、雜誌や、新聞、はては團扇、煙草盆、中折帽まで亂れ亂れて乗つかつて居る。折々北風が障子の隙より吹き込んで、何だか不安の念をそゝる。此處に義郎は文人畫の襖を見つめながら、夫婦二人の挨拶がてらな愛嬌をうけてゐる。

初對面若くは久濶の應接には或意味の警戒と緊張とを要する。何故ならかゝる場合には比較的著しく人の特徴乃至缺陷が明瞭に表示せられ尙且つその認識に最も都合よく相手の好奇心が鋭く研がれてあるから。人によつて癖も違がう。大抵多辯な人は主客の間に利害も關係も興味もないといふやうなやくざ談に花をもたせたがる。従つて淡白たんぱくであり得る代りに、如何にも底の淺い小川の清水の如く掬めば手が地に觸ふれはしないかと怖れられる。飽あくまで口を切るまいとする人がある。殊に知識階級の人だと、それが惡意からと好意からとに關らず甚しい。それは、對象の人物のなるべく確かな輪廓を求めようとするのであらう。或は無言はその思考と相結果するのもかも知れぬ。卑劣になると。その對話を以て相手自身を愚弄、冷笑しようとする。

今の義郎の沈黙は、さして意義あるでも權威あるからでもなかつた。彼はいはば考へたい或ものがあつたからその方に心が傾きつつあつたのだ。物とは艶子である。その癖、内氣な艶子は影さへ見せなかつた。笑ひ聲さへ漏れなかつた。義郎は考へた。主人は今日の訪問を何とぞつてゐたらう？ 別に重要な事件を齎したと思つてゐるかしら？ まさか娘との戀などは考へまい。さうだ自分にはそんな心は毛頭ない。向ふだつてさうだ。つまりなつかしいんだ。唯なつかしいんだ。この感情はすべての理論を超越してゐる。若し他人が自分の彼女の對する心的狀態を強ひて戀だと定義せねばならぬといふならそれでもよからう。お前には戀

といふ分子はないが、おまへの頭で作つた理想の女性の或どこかの一部分を彼女の上にめつけ、それを藝術的に文學的に憧憬してゐるのであるとすればそれも結構である。結構ではあるが自分には不満である。兎に角自分にはわからない、全くわからない。茲に理論は無用である。この場合の理論は畢竟、『美』の極致を究めようとして審美學をやる學者が、その結果が意外にも、自己を裏切り、すべての美を失ひ、悲しい矛盾に落膽するのと同様である。

自覺は或意味に於て吾人の生活の破壊者である。

× × × × × × ×

今日の午過ぎである。義郎は歸省このかた、毎日雪に降られて稍不平であつた。試験で活字が充満した眼を再び活字ばかりにさらすといふのが餘りに單調にも考へられた。昨日今日快情。雪も幸、解けてゐる。この時彼は應接間に居た。妹の三重子が椅子を近く寄せて大理のストーブの前で話のついでに艶子の噂をしてゐた。義郎はそぞろに艶子を考ふるべくせられた。それから彼は抽象的に赤い焰の真中におも長い顔を書いて見た。それがニツと笑つた。彼は黙つて見つめてゐた。再び笑つた。心が行きたいと叫んだ。何處へ行くか。今度は低い調子で囁いた。彼はこの時紫天鵝絨から立ち上つた。

「さうだ、自分に行くんだ。」

三重子是不思議さうに兄の横顔を見守つてしばたいた。兄の顔は果敢ない勝利の色に映れてゐた。

「では三重子、僕これから町へ行かう。幸四郎の初芝居だよ。連れか？　をばさんどこに行つたら誰か居るわ。そしてね、一寸炭坑に廻つて艶さんを尋ねようと思つてさ。」

「ではお仕度でせう？」

「さうよ、速く。」

「せつかな兄さんだこと。そんなにせきこんで」

「そんなに僕せつかちかい？ だげど男は決斷が強けりや強い程斤目が上るといふもんだよ。」

「だげど兄さん。あんまりだもの。」

「女つてば存外我儘だよ、自分に嫌な時はいつもそんな風に。」

「そんな氣ぢやないのだわ。」

「そんなら速くないか。」

三重子はかくて納戸に歩を運んだ。再び來た時には、お松がついてゐた。二人は大島の重ねに鐵色の兵子帶に帽子と順次にテールの上に揃へた。

「そして今晚どこ？ おばさんどこ？ 鳩ちやんどこ？」

「凄く冷かしだね、お松と二人だと思つて。」

「オッホホ、いゝ、いゝ、お兄様を冷かしななかしませんわねお嬢様。」

「兄さんは弱味があるからすぐあんなに氣が曲るとさ。」

「オヤオヤ口の悪さつたら。」

「兄さん炭坑だけはおよしよ。お寒いぢやないの。」

「そしてお風邪召していらつしやいますのに。」

「いゝよ。一寸なんだから。」

三重子は何氣なしに置時計に目を注いだ。

「あら兄さん兄さん。もう間がありませんわよ。松やそれ俤呼んで頂戴。」

「行けるかな。松や速ぐんだぞ。」

から騒ぎ立て、家を出た義郎は二階の六疊に靜かに座を構へて居る。柴茶を啜りつゝ厚からぬメリンズ座蒲團の上で自分の半時間前後の皮肉な矛盾に想到した時、流石に頰笑まれずに居られなかつた。艶子の父は大きな胸に博多をキチンと巻いて手持無沙汰に肉の厚い掌で火鉢の縁を撫廻はす。飲みさしのお茶は隙漏る風に冷めきつたせいかわい湯氣も立てぬ。外にはバラ／＼と一しきり、霰が隣のトタン屋根を叩く。界限一帶の空氣は人聲で濁され、遠く近くの機關の響や車の軋りでかき亂されて打ち震うて来る。順境に立つ青年と、六十年の生涯に世の辛酸を嘗め盡した老商人との會話は最初からその成立がむづかしい。だからとて口を結び切つてばかりも居られまい。徳義上、習慣上、益ない事も言はねばならぬ。そこに世渡りがあり人間味もあるといふもの。

「何時、東京からお歸りで？」

「ハイ、それは五ヶ月程前になります。それから長らく福岡に商談上滞在しましたので。實は私もほんの近日歸りましたやうなわけで。何分、これでは人間もつまりませんね。ほんとうですよ。」

竹生屋三代目の徳左衛門は當の主人である。竹生屋は某町の呉服の老舗であつた。

「賣家と唐様で書く三代目とは、誰の句ですかしら、随分皮肉つてまさあハ……。」

軽い口は思はず滑る。或人の憐むべき眞狀を吐露されて、言の施すべきを知らぬは廉潔の士である。

「あちらではいつも御世話になりました。伯父の家に行つてもあんな風ですから遂。」  
義郎のことは幾分淀みを持つが一種の重々しさと決して曇のないたのもしさも含む。

「いぬどう致しまして。それも私が容易にからだがなくて、あなたのいらつしやるのが三月そこらですもの御愛憎も如何でしたかしら。然し、どうして伯父様の御宅はあんなですかね。矢張り奥さんが御自身の味方でないと御氣に召さぬですつてはどうでせう。私なども、かうしてゐれば随分お叱りを受けた事もありますがねハハハハハ。」

「あれには弱りますね。艶さんいらつしやいますか。」

「はい居ますよ。これ久や、艶子居ないか一寸お呼び。」

「おいそがしいんでせう。」

「なあに！あれに何が出来るものですか。まだあの年で遊びたいがせい一杯です。」

「そりや何處だつておんなじでせう。」

「さうですかね。いやさうばかりぢやないでせう。でも考へて見れば女は處女期が一日でも長ければ長い程本人にとつては幸福でせう。もう家を持つてから二度とあんな楽しい日は絶対にないでせう……。さういへばお妹さん今年お幾つですな？」

「妹ですか。あれは六だとか七だとか騒いでましたつけ。」

「さうさう。お嫁さんも間ありませんや。ハハ……。」



「まだまだその段ぢやありません。まだお人形が大好きでして、この間もお正月早々雛を出すなど皆に笑はれました。ごんな心ですかしら。」

「いね、あんな無邪氣なお嬢さんもお少い。この年頃には女は何だかひねくれたがりますがね。心機轉換期とか言ひましてね。親もこの頃が一と骨ですよ。」

「そんなものですかね。」

まだ艶子は出ない。義郎はさつきから淡い寂寥の感に迫られてゐた。

「來ませぬ艶子は。若い同志だ何だ、かだつて引込んでしまひます。おもしろいもんでさ。あれでも不斷は多少お轉婆ですのになハハハハハハ。」

「ハハハハハハハハ。」

笑の後には復、重苦しい無言に返つて、主人は半ば禿げ上つた頭を平手でさかしまに撫でる。

その体は幾十貫あらう。頸元からデツブリと肥つてゐる。

「あなたは酒はいけませんでしたね。」

「は全いです。」

「ほんとに？」

「全いです。遺傳ですな。」

「結構ですな。こればかりはよされるならよしたいものですな。それが酒を飲むのもいゝとしましてねすぐ酒に吞まれますから怖しいので……」

主人は黒い二日市を襟にしたフランネルに包まる胸の裡に、例へば膀胱の結石の様にコッソんと思ひ當るべき或物を藏してゐる。

「酒の事では困つた事があるんでして。實は姉娘の琴ですね。あれの亭主が廓狂ひはじめましてその爲め琴は今宅に歸つてますので……。」主人は暫く語り續いた。

義郎の訪問は勿論艶子の爲めであつた。幸四郎も宗十郎も彼にはさして重要でなかつた。少くとも現在の心理では重要でなくなつた。榮華にも沈んでゐる義郎とは反對に逆境でも樂天的な主人の氣分が挺子となつて義郎の心をグイグイと浮ばせようとする。それでも尙義郎の肺尖には安煙草の脂の如くしつかりへばりつた紫色の重苦しさがある。電燈もついた。行かうといふ衝動が頻りに促がす。折角だ、彼女が来るまでといふ淡い執着が袖をひく。風邪には夜露が一等悪いよと衝動が憤る。でもさあ。と執着が媚びる。結局彼は座はることもなく立つこともなく、座つて、そして例の主人の話を聞くべく餘儀なくせられる。兩足ともしびらして石膏の足ではないかとつめつて見る。この儘立てば倒れるにきまつてゐる。まゝよと腰をおちつける。菓子鉢に餡入りの圓いのが淋しく固まつてゐる。彼は二つ三つつまんで見三つ目のを楊枝の先にささへながらジットと見つめる。卵焼と見せたのはインキの色らしい。急に感傷的になる。豪商も家を拂つた曉には、はじめである。炭坑地といへば町の人は直覺的に傳習的に恐怖と憎惡を抱いてゐる。そこにあの家の主婦が駄菓子子をびさいでゐるのである。十三絃に澄ました艶子の手も今日は借家の古柱に雜布をかけねばならぬ。榮枯はこんな小天地にも廻轉を止めぬ。

「田舎の菓子つてば素よりお口にはかなひますまいが……。」

「いい結構です。戴いてゐます。」

新聞もない、月後れの演藝畫報と新演藝とがあゝの簞笥から下された。話頭が芝居の方に進んで行く。義郎はその一冊を見るときもなしに開いてゐる。その目は立つべき機会をぞ探してゐる。いつの間にやら若い女が敷居の向側に手をつかへてゐる。

「いらつしやいまし。」と丁寧に桃輪を下げる。主人は無頓着に、言ふ。

「艶子どうしておそひ？」

「濟みません。木下町にお使してましたので。」

運命は纖弱な女をも點燈後、街頭に走らせる。艶子の耳朵は寒風に充血してゐる。父に注いでゐた彼女の視線が再び義郎に轉じた時その面は一層あでに見せた。

「お互にどうです？變りてますか。ね？」

主人は新しい活氣を副へて居る。二人は黙つてゐる。

義郎は答へに困じてゐる。

「艶さんは餘程大きくおなりの様ですよ。」

「体ばかりですから仕方がありません。」

艶子は下を向く。体を斜にしなを作る。美しい五本の指が疊のへりを抑へてゐる。艶々しい眞珠の爪が揃つてゐる。小指だけは外の三本から離れてゐる。

「艶子、お前、嶋崎さんはお變りか、どう？」

彼女の答はない。暫く羽織の紐を玩んでゐた。

「わたし、わからないわ。」その聲はあまりに美しかった。義郎は一時に心の輕さを覺て彼女を見た。しかしその顔は低くして見へなかつた。主客の間の話は艶子には大人び過ぎて居た。父子間のは、第三者が挟つて打ち解けて出来なかつた。青年同志には親の權威が蟠つてほしいまゝな追憶をせしめなかつた。だから何だかトンチンカンな會話が蠶の糸の如くにあらで蚯蚓が地中より土吐く如くにポロリ／＼と降ることもなく流ることもなくわきいでた、そしてそれが決して不愉快の氣分を以てしてではなかつた。反つて後には多少の感激をさへ伴つて來た。

「艶子、お前、あつちどこつちとどちらがいい？」

これは序文的だとも、別に底がありさうにもとれる。

彼女はそんな深い事を意識せぬ。その言は常に純朴である。

「わたし、どつちでも。」

すべての自己を投げかける女性のいぢらしさがある。事の成行に就いて充分の希望はあつても之を表示し之を確實に自覺し得ない處女のやるせなさがある。

「では、もう一度お父さんと有樂町に行つてみるかな。」

彼女は有樂町と聞いては、追に目をおとした。あの四年の春秋を泣き明かした痛ましい慕郷の涙を繰り返すかと思つた時、孤獨、恐怖、悲哀の様々な情緒がその中腦を前後に突き刺した。又現在母と姉との慈愛にすがらうとすれば、腰辨の男の幻が彼女の左右につきまとつてきつい憎惡が心臓を搔き廻した。その反動は直

覺的に涙腺を襲つた。もう艶子は耐へ切れず鈴を張つた瞳には露の玉を宿らして居る。それがたまらなく主客の憐愍を催はした。

「悪い。そんな事、言ふんぢやなかつた。」

主人の巾廣い額はその時、さつき琴子の境遇に言ひ及んだ時と恰度同じに、深刻な眞面目さに返つてゐた。この眞面目さに、人事逆轉の憂懼と悲哀とを混じたものがお久の性格である。その時遠慮がちに踏む梯子に衣きよずれがしてお久は艶子の左に現はれた。光の具合で非常にやつれて見ゆる。はへぎはが少し抜けそめて、まばらながら白いものさへ混へてゐる。到底過去に返る事は覺束ないであらう。

「艶ちゃん泣いてるの。どうして？ 今日だけは我儘言ひませんのよ。ね。」

そしてこれが義郎の家とは血縁でもあり、また許嫁の叔母でもある。久子の語尾は何處だか姪のそれに似通つて居る。姪とは鳩子である。義郎は沈思が好きである。すでに空想を畫いてゐる。

自分は今から鳩子の家に行くんだが……豫想してるかしら。自分が着いたら何してるかしら……、人生は不可解だ。否偶然の寄合である。自分はおの女と一緒になるのか……。全く諷刺的だ。だが事實の力には抗し難い。そしたらお久も祝つてくれるだらう。可愛想に借著でもして来るだらう。贈物一つにも工面くめんするだらう。それこそ貧者の一燈である。東京の伯父が澁面するのは雲泥の差だ。あゝ人生は心だ、彈力的生活はそこに生ずる。

主客二人の前に黒の猫足が据えてある。長く短く。塗が剥けてゐる、その真中に蓋碗があつて具雜煮が盛つてある。白い餅に若菜の色合が調和して見ゆる。それに椎たけ、鶏、銀杏が格好に這入つてゐる。中味は、

周囲と對照する時、如何にも優れて出来てゐる。わざわざ仕出しを取つたかもしれない。お換への給仕は艶子とする。久子は食事の用意にとて下に下りた。

残された艶子は圓盆を膝に乗せてゐる。茶がかつた型附らしい羽織の細いクリームの紐がさかしまに寫つてゐる。艶子は大方おちつきが出来た。けれども流石に自分から談を切り出す勇氣とではない。お茶になつて義郎は彼女に會話をしむけた。

「いつでしたかね。帝劇に案内して戴きましたつけ。そして本野と一緒にしたね。」

「はいさうでした。その歸りには生憎くお雨でしたわね。わたしよく覺てますわ。」

「あゝ、その晩は御宅にお世話になりましたね、それはさうと、本野はこの炭坑にゐると聞きました。」

「いらつしやいますよ。第三事務所とかに勤めていらつしやいますんですつて。」

「あゝ、本野隆造君ですか。」

「御存じですか。」

これ以上、本野に就いて話は進まなかつた。

「その時は男優劇でしたね。そしてどんな課題でしたかしら。」

「私もはつきりしませんけど、あの、よく人を暗がりに切りましたれうな。ホホ、ホホ。」

「さうです。さうです。平井權八の鈴ヶ森です。」

「ちや、幡隠院とでつかず、成程。」

「お父さんは知つてますね。そしてね。お父さん、あんなのもあつて。」

「どんなのさ？」

「美しいね、女の人がありますの。そしてその御主人が随分御無理な方だね。ひどい事ばかりなさるの。」

「それから。」

「けれども、その女の人には、思を交はした人があるんですつて。そして、それが御主人に聞えるの。」

「そして。」

「その庭に大きな櫻か二本も三本もあるんですよ。そこに女の方はきつく縛られますの。それから男の人を慕つてそれはそれは悲しく泣くんですの。」

「艶さんはよくおぼえてますね。」

「あら、そんな事仰しやるから、私先は忘れて。」

「その時、盛りを越した櫻が盛んに散るんでせう。女は花吹雪に死ぬ程、身をもがくのですよ。それからひどい事、男が主人の召使でしたので、早速綱にかけて其場に來るのです。女は口惜しながら男が虐殺になるのをおめおめ見せつけられるのです。」

主人は興がつてゐた。艶子はその場を連想して、自分自身の胸をかい抱いてゐた。

「私、どんなにか泣いたでせうね。あの時は。」

「ハハハハハハ。すぐ艶子は泣くんだから矢張りハハハハハハ。」

「ホホハハハハ。いつもお父さんはあゝばかり仰しやるけど……あの時女の方は皆泣いてなすつたんですわ。」

よ。」

「艶さん僕は女は泣くのがいいと思ひます。そこが女ぢやありませんか。男の本領が強い所にあるなら女は弱い所に誇りを見出すべきでせう。そして涙はその發露で一種の美です。だからその美を見る時に強い感激を生じ仇も恩と變り悲劇も喜劇もそこに起るわけです。」

義郎は半ば辯護的、半ば議論的に言ふ。

「御尤も。私も御同感です。矢張り、いい、いい、いいが第一です。御尤もです。」

艶子は一人追懷の糸をたぐつてゐた。それが黄となり紫となり、灰色となり赤となつた。

「そして櫻見はどうだめでしたわね。」

「荒川ですね。どうしたんですかしら。」

「お雨でいつもより早く散つちまつたんですわ。」

「葉櫻でもよかつたんですがね。」

思はず長居した義郎は蒲團から滑り下りた。

「今日はおゆつくりいでせうにね。」

「いね、あの、町の方に行くつもりなんですから。」

「だけど、も一時、話して頂戴な。」

「艶さん家にいらつしやい。三重子も淋しく居ますから。」

「愈々ですか。何一つおあしらが出來ませす、反つて御迷惑でしたわ。艶子。お母さんに、お歸りだから



つて。そしてちよいと時間表を見ておいで。」

「はい。」と彼女は軽く立つた。

× × × × × × ×

冬の日はずく落ちた。空には村雲が行き交つて明日の天氣は覺束なかつた。泥道の兩側には荒物や呉服や食べ物などの小店がふしだらに軒を並べて居た。頬冠りや笠の男や女の勞働者がひなびた言葉でののじりつつ一群又一群と歸つて行く。霰は落ちない。けれども町角のブリキのつちやたびが風毎に唸つてゐる。近所に俤は居ないが廣場に馬車がありますと教はつた義郎はマントの襟を深く立てて明い四つ辻につくねんと立ちわびてゐる。街燈の下まで姉妹で送つてくれた艶子、それは涙の美しい、夢二の畫に似た女であつた。けれども桃輪の彼は永久に過去になるであらう。もう一度と思つて振り向いた時、すでに女の影はなかつた。小倉の服を着た十才さうをやつと越した位の男の子が片手で烏打帽を抑へながら眞鍮の喇叭くちやに口を當てた。その音は四圍の様にも似ず、何だか呑氣に人の氣を長くするやうに聞えた。彼は義郎を顧みて、しらじらしく言ひ放つた。

「もう馬車は出ますばい。」

馬車は一頭立ての乗合であつた。義郎はこのやうな箱馬車には辛い經驗を有してゐた。嫌などは思ひながら馬車の戸に手をかけた時には、片足もネット宙に浮いて馬はコトリ／＼歩き出してゐた。するとあの小供の手で墨塗の小さな戸が立てられた。中は暗かつた。外のアーチ燈の爲、光のない狭い部屋は一層暗く思はれた。先客が四五人座を占めてゐた。義郎が入れば座は左程裕ではなかつた。義郎の後から子供を抱いた老婆

と半玉風の娘が馳せつけた。これで身動きもきかなくなつた。義郎はさつきから身がゾク／＼する。足か切りに冷わる。彼は手をつかねて目をつぶつてみた。「ハイ——。」といふ馭者の聲。振り上げた鞭は低い天井のトタンに中つてバン／＼と鳴る。馬はまだスピードを出しさうもない。又バン／＼と響く。坑夫らしい五十格恰の男がやかましいとつぶやく。娘が義郎の右脇で口をすぼめて笑つてゐる。漸く車は速力を得たらしい。然し義郎は頬ばかりはてつてくる。雨除のカバーの爲外の模様は一寸も見ぬ。折々足先ばかりの人や犬が通る。見ぬないとじれつたくなる。重いカバーをさしあげると手頸から零度下の風がスーッと胸まで通る。満身の血が一時に氷結した氣持になる。頭がフラ／＼する。霰は翼にみぞれ變つてゐる。常にないたよりなさを感じられる。轍はボンと石にはねてドスンと窪みに落ち込む。砂利にはまつてすらまはりする。馬車は時々かうして進んで行く。義郎は耐へられない。馬車のわづらはしさと身の不快とが呪咀したくなる。車はきしりを立てて長い石橋を乗切つた。彼の心はすさんでくる。

「さうだ。今日はいくら悪くつても是非鳩子の家までやつつけるんだ。そしてトント寝込んでやるんだ。鳩子を驚かしてやれ。この様子なら二三日は大丈夫床に居よう。」

かと思ふと又彼の氣分は次第に緩和される。

「そしたら皆のもては如何かしら。末つ子の秀君が兄さん兄さんてなづいて來るかしら。去年は氣まづい思ひをした。家の兄さんになつて頂戴などいつて皆を笑はせた。もうあんな馬鹿な事もあるまい……。二三日も居たら家では三重子とお松の奴がまた噂をするだらう……。だが寒い。背に氷を置いた様な心地だ。」  
喇叭が鳴る。一切り鳴る。疲れた馬は再び威勢をつけて走り出す。